V-N タイプ二字漢語動名詞における包摂関係を有する項の外部表示

長谷川　拓也

Abstract

In Japanese, there are many V-N-type two-character Sino-Japanese verbal nouns, which are composed of a verbal element and a nominal element. This paper addresses "external specification" (Kageyama 1999), the phenomenon where V-N-type two-character Sino-Japanese verbal nouns take arguments whose case marker is identical with the case marker that appears in the corresponding native Japanese verb phrase. For example, the verbal noun *zyu-syoo* ('win a prize'), which is paraphrased as *syoo-o ukeru* ('win a prize'), can take an extra argument,[1] as in *Taroo-wa nooberusyoo-o zyu-syoo si-ta* ('Taro won a Nobel Prize'). On the other hand, the verbal noun *too-seki* ('throw a stone'), which is paraphrased as *isi-o nageru* ('throw a stone'), cannot take an extra argument, as in ??*Taroo-wa Ziroo-ni ookii isi-o too-seki si-ta* ('Taro threw a big stone at Jiro'). The aim of this paper is to pinpoint key factors which determine whether V-N-type two-character Sino-Japanese verbal nouns can take extra arguments. I will argue that one of the key factors is the level of specificity of the nominal components contained in the V-N-type two-character Sino-Japanese verbal noun in question.

キーワード：日本語，V-N タイプ二字漢語動名詞，外部表示，包摂関係，意味の抽象度

1. 外部表示という言語現象

本稿において取り扱う言語現象は、「受賞」や「入学」といった、動詞要素と名詞要素で構成されている二字漢語動名詞（以下、V-N タイプ二字漢語動名詞）による「外部表示（external specification）」（影山 1999: 90）である。これは、V-N タイプ二字漢語動名詞が、対応する和語動詞句でパラフレーズされた際に現れる格と同じ格で項を統語的に表出させるという言語現象である。

一般的に、V-N タイプ二字漢語動名詞は動名詞内部に取り込まれている名詞要素をそのままの形で項として表出させることは不可能である。また、名詞要素と意味的に矛盾した要素を項として表出させることも不可能である（影山 1980、小林 2004、仁田 1980、島村 1985、張 1992、他）。たとえば「落馬」という動名詞は、「馬から落ちる」という和

語動詞句でパラフレーズできることからカラ格で外部表示が可能かどうかに着目するが、(1a)[2]のように名詞要素「馬（バ)」と意味的に同一の名詞である「馬（うま)」を項として表出させようとすると、冗長であるため容認されない。また、(1b）のように名詞要素「馬」と意味的に矛盾した「自転車」のような名詞を表出させることもできない。

(1)　a.　*　馬から落馬する。
　　b.　*　自転車から落馬する。(仁田 1980: 329)

しかしながら、修飾語句によって何らかの情報を付加した形ならば、名詞要素を項として表出させることが可能になる（Jacobsen 1982、影山 1980、小林 2004、仁田 1980、島村 1985、張 1992、他)。以下の（2）では、「全速力で走る」という部分が付加的な情報となっている。

(2)　彼は全速力で走る馬から落馬した。(影山 1999: 90)

これに対して、修飾語句を追加した形であっても外部表示が不可能だと判断される動名詞も存在する。たとえば「投石」という動名詞は、「石を投げる」とパラフレーズされることからヲ格での外部表示ができるかどうかに着目するが、(3b）の「大きい石」のように形容詞をつけたとしても外部表示ができないと小林（2004）は判断している。

(3)　a.　　群衆が警官に投石した。
　　b.　*　群衆が警官に大きい石を投石した。(小林 2004: 95)

これらの実例の観察をもとに、本稿で議論するのは、なぜ動名詞によって外部表示の可否に関してこのような差異が存在するのかということである。この「外部表示」という言語現象は、決して多くはないがいくつかの先行研究において言及されてきた。しかしながら、なぜ外部表示が可能か不可能かについて動名詞ごとに差異があるのかということに関して分析をしている先行研究は管見の限り少ない。多くの先行研究はそもそもそのことを問題としておらず、またそのことについて分析をしている先行研究でも、外部表示が可能か不可能かを判断するための基準が具体的に示されていないという問題点があった。このような状況をうけて、本稿では、動名詞内部の名詞要素が持つ意味の抽象度が外部表示の可否を決める一要因であるという仮説を立ててその検証をする。その際、名詞要素の意味の抽象度を測る基準として Barros（2013）が提示しているテストを採用する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節において、漢語動名詞に関するさまざま

な言語現象について非常に詳細な記述的分析をおこなった小林（2001, 2004）による V-N タイプ二字漢語動名詞の分類を検討し、その分類の問題点を指摘した後で、本稿がとる立場を明らかにする。その後 3 節で、動名詞内部の名詞要素が持っている意味の抽象度が外部表示の可否を決める一要因となるということを主張し、実例を交えながらその関係を検討する。また、3 節ではさまざまな文脈の影響を考慮した上でその関係を議論することもおこない、さらに名詞要素の意味の抽象度を測るテストの問題点についても言及する。加えて、名詞要素の意味の抽象度に着目するだけでは外部表示の可否をうまく説明できないような動名詞についての考察もおこなう。そして 4 節では結論と今後の課題を述べる。

2. 小林（2001, 2004）の検討と本稿の立場

本節では、V-N タイプ二字漢語動名詞の外部表示について詳細な記述的分析をおこなった先行研究である小林（2001, 2004）を取り上げる。まず 2.1 節において小林による V-N タイプ二字漢語動名詞[3]の分類について言及し、次に 2.2 節で小林の分類の問題点を指摘した後、V-N タイプ二字漢語動名詞の外部表示の可否に関して本稿がとる立場を述べる。

2.1 小林による V-N タイプ二字漢語動名詞の分類

二字漢語動名詞をその構成要素から細かく分類した先行研究に野村（1999）がある。小林（2001, 2004）は野村の分類のうち V-N タイプ二字漢語動名詞に焦点を当てて、以下に示す 2 つの観点をもとにさらに詳細な分類が可能であると主張した。

(4)　動名詞内部の名詞要素と関係づけられる項を統語的に取るかどうか。
（つまり、外部表示をするかどうか。）

(5)　外部表示をするなら、外部表示された項は動名詞内部の名詞要素とどのような意味的関係になっているか。

V-N タイプ二字漢語動名詞はたとえば (6) に挙げたようなものが存在する。漢語動名詞を和語動詞句でパラフレーズしたときに現れる格の種類は、ヲ格、ニ格、ガ格、カラ格の 4 種類がある。

(6)　V-N タイプ二字漢語動名詞の例：
「受賞」＝「賞を受ける」（ヲ格）
「入学」＝「学校に入る」（ニ格）

「開花」＝「花が開く」（ガ格）
「落馬」＝「馬から落ちる」（カラ格）
「出港」＝「港を／から出る」（ヲ格／カラ格）

本稿ではこの V-N タイプ二字漢語動名詞に焦点を当て、その他のタイプの漢語動名詞は考察対象外とする。たとえば「銃殺」[4]は、「銃で殺す」というパラフレーズからわかるとおり N-V タイプ二字漢語動名詞なので、本稿では取り扱わない。以下、2.1.1 節では（4）の観点、2.1.2 節では（5）の観点に基づいた小林の V-N タイプ二字漢語動名詞の分類について簡潔に述べる。

2.1.1 外部表示の可否による分類

小林は、(4) の外部表示をするかどうかという観点に基づき V-N タイプ二字漢語動名詞を以下の 3 種類に分類した。

(7)　項を取れない（外部表示が不可能な）タイプ
　　例：挙式、投石、読書、処刑、……

(8)　項を取れる（外部表示が随意的な）タイプ
　　例：投票、登山、入院、預金、……

(9)　項を取らなければならない（外部表示が義務的な）タイプ
　　例：観戦、入学、開封、除名、登頂、……

(7) の「項を取れないタイプ」は、動名詞内部の名詞要素と意味的に関連した項を取ろうとしたときに文が容認できなくなる動名詞である。たとえば「投石」の場合、(10b) の「大きい石」のように、形容詞などの修飾語句によって項が名詞要素にはない付加的な意味を持っていたとしても容認されない。

(10)　a.　　群衆が警官に投石した。
　　b.　*　群衆が警官に<u>大きい石</u>を投石した。（小林 2004: 95）

(8) の「項を取れるタイプ」は、動名詞内部の名詞要素と意味的に関連した項を取っても取らなくてもどちらでも容認可能となる動名詞である。たとえば「入院」の場合、(11a) のように外部表示をしない形式も、(11b) のように「A 病院」という項を表出する形式もどちらも自然に用いられる。

（11） a. 太郎は先週から入院している。
b. 太郎は先週から A 病院に入院している。

(9) の「項を取らなければならないタイプ」は、動名詞内部の名詞要素と意味的に関連した項を取らない場合、十分な文脈がない限りは文の容認が困難となる動名詞である。たとえば「入学」の場合、（12a）のように外部表示をしないと情報的に不足したところがあると判断され、（12b）の「国立大学」のような項を表出させる必要がある。

（12） a. * 太郎は入学した。
b. 太郎は国立大学に入学した。（小林 2004: 96）

このタイプでは、以下の（13）に示すように、外部表示がされていない場合は情報量が不足しているため「何を？」などの疑問が誘発される。

（13） A: 太郎が開封したよ。
B: 何を？
A: 花子の手紙だよ。（小林 2004: 97）

2.1.2 外部表示された項と名詞要素との意味的関係による分類

小林は、(5) の外部表示された項と名詞要素がどのような意味的関係になっているかという観点から V-N タイプ二字漢語動名詞を以下の 2 種類に分類した。

（14） 包摂関係を有する項を表出させるタイプ
例：入学、開会、求刑、作曲、受賞、……

（15） 所属関係を有する項を表出させるタイプ
例：開封、除名、追跡、登頂、変質、……

（14）の包摂関係とは、たとえば以下の例に見られるような意味的関係である。（16）において、動名詞内部の名詞要素である「学」は学校一般を表し、外部表示された項である「国立大学」は特定の種類の学校を表している。つまり、「学」が「国立大学」を包摂しているという関係になっており、小林はこの関係を包摂関係と呼んでいる。

（16） 太郎は国立大学に入学した。（小林 2004: 96）

一方（15）の所属関係とは、以下の例に見られるような意味的関係である。（17）において、動名詞内部の名詞要素である「封」は外部表示された項である「花子の手紙」の一側面（一部分）である。つまり、「封」と「花子の手紙」は部分・全体の関係にあり、「封」が「花子の手紙」に所属しているため、小林はこの関係を所属関係と呼んでいる。

（17）　太郎が花子の手紙を開封した。（小林 2004: 102）

本稿では、紙幅の都合から、前者の包摂関係を有する項の外部表示のみを分析対象とする。そのため、これ以降用いる「外部表示」という用語は「包摂関係を有する項の外部表示」のみを指し示す。後者の所属関係を有する項の外部表示については、本稿では取り扱わず、別稿での分析とする。

2.2 小林（2001, 2004）の問題点と本稿の立場

2.1 節で小林（2001, 2004）による V-N タイプ二字漢語動名詞の分類を概観したが、本節ではその分類の問題点を指摘した上で、V-N タイプ二字漢語動名詞の外部表示に関して本稿がとる立場を明らかにする。

2.1.2 節における、外部表示された項と名詞要素との意味的関係による分類に関しては今のところ異論はない。問題となるのは、2.1.1 節での外部表示をするかどうかという観点による分類である。先述のとおり、小林は外部表示の可否によって V-N タイプ二字漢語動名詞を 3 種類に分類したが、V-N タイプ二字漢語動名詞のふるまいを詳細に観察すると、小林の分類が不十分であるということが明らかになる。具体的には、さまざまな文脈や動名詞の他の項による影響で、外部表示が不可能だとされている動名詞が外部表示をするようになったり、外部表示をしなければならないとされる動名詞が必ずしも項を取る必要がなくなったりといったことが観察される。詳細な分析は 3.3 節でおこなうこととする。

したがって、小林の分類のように、この動名詞は外部表示が不可能で、この動名詞は外部表示が義務的である、と語彙項目ごとに峻別することには無理があると言える。本稿は、さまざまな文脈の影響を考慮しない場合において、動名詞内部の名詞要素が持つ意味の抽象度が V-N タイプ二字漢語動名詞の外部表示の可否を決める要因の 1 つとなっていると主張する。名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係については、3 節で詳述する。なお、外部表示の可否が語彙的に決まると考えられる動名詞もいくつか存在するが、それに関しては 3.5 節で検討する。

3. 名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係

本稿は、V-N タイプ二字漢語動名詞の外部表示の可否を決める一要因として動名詞内部の名詞要素が持つ意味の抽象度が挙げられると主張する。2 節で簡単に触れたように、さまざまな文脈の影響まで考慮すると外部表示の可否が変化しうるため、名詞要素の意味の抽象度はあくまでも一要因であってこれだけで外部表示の可否がすべて決まるわけではない。他の要因については、3.3 節以降で議論する。

種々の V-N タイプ二字漢語動名詞のふるまいを観察すると、名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否について以下のような関係が見て取れる。

（18） 名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係：
ある V-N タイプ二字漢語動名詞の名詞要素が総称的（generic）な意味を表している場合、その動名詞は外部表示をするほうが自然である。一方、ある V-N タイプ二字漢語動名詞の名詞要素が個別的（specific）な意味を表している場合、その動名詞は外部表示をしないほうが自然である。

ここで、「名詞要素の意味の抽象度」とは何なのかについて、Barros（2013）の名詞の意味の抽象度を測るテストを引き合いに出しながら説明を試みる。Barros は以下の（19）に示すテストを用いて、名詞によって意味の抽象度の度合いが異なるということを示した。

（19） a. Jack ordered food, but Sally doesn’t know what (exactly).
b. Jack ordered a pastry, but Sally doesn’t know what *(exactly).
c. * Jack ordered an éclair, but Fred doesn’t know what exactly.
(Barros 2013: 298)

（19）は、*food*, *pastry*, *éclair* の 3 つの名詞が持つ意味がそれぞれどの程度個別的かを示すテストである。まず *food* は、種々の食べ物を言い表すのに用いる総称的な語であるため、（19a）は *exactly* があってもなくても容認される。それに対して *pastry* は *food* よりも指し示す内容が限定されているので、（19b）は *exactly* を省略すると非文とみなされる。さらに *éclair* は *food*, *pastry* よりも意味が個別的であるため、（19c）は *exactly* があったとしても非文と判断される。つまり、名詞の意味の抽象度とは名詞の指し示す内容がどのくらい個別的かということで、*food* のように総称的なレベルから、*éclair* のように非常に個別的なレベルまでさまざまである。

この Barros（2013）におけるテストに着想を得て、本稿では動名詞内部の名詞要素が持つ意味の抽象度を測るために以下のようなテスト[5]を用いることとする。そして、テス

トの文が容認される場合、そのときの名詞要素は総称的な意味を表し、一方でテストの文が容認されない場合、そのときの名詞要素は個別的な意味を表すこととする。

(20)　太郎は N を V したが、私は具体的に太郎が何を V したかわからない。

(20) に示した名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係は、文の情報量の問題と深く関連している。ある名詞要素が総称的な意味を表している場合、その名詞要素の下位範疇に位置する事物のうち具体的に何が問題となるかについての情報は別個に補われなければならない。したがって、その名詞要素を取り込んでいる動名詞が外部表示をすることによってその情報を補填するということになる。これに対して、ある名詞要素が個別的な意味を表している場合は、その名詞要素の指し示す内容がすでに十分具体的であるため、それ以上の情報を付け加える必要はない。そのような情報を付け加えてしまうと、むしろその情報は余分であると判断される。したがって、その名詞要素を取り込んでいる動名詞は外部表示によって情報を付加することが不必要だということになる。

以下では、文脈がないときに外部表示をするほうが自然な動名詞としないほうが自然な動名詞のそれぞれについて、(18) に示した名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係を具体的に見ていくことにする。3.1 節では前者を、3.2 節では後者を扱う。文脈の影響をも考慮した、名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係については 3.3 節で議論することとする。(20) に示した名詞要素の意味の抽象度を測るテストの問題点については、3.4 節で言及する。3.5 節では、名詞要素の意味の抽象度に着目するだけでは外部表示の可否をうまく説明できないような動名詞について考察する。

3.1 文脈がないときに外部表示をするほうが自然な動名詞

まず、文脈を考えない場合に外部表示をするほうが自然な動名詞について考察する。たとえば「受賞」は、以下の例のように外部表示をするほうが自然である。

(21)　a.　#　太郎は受賞した。
　　b.　　太郎はノーベル賞を受賞した。

ここで「受賞」の名詞要素である「賞」の意味の抽象度を測るために、先述のテストを用いる。

(22)　太郎は賞をもらったが、私は具体的に太郎が何をもらったかわからない。

(22) が問題なく容認されることから、名詞要素「賞」は総称的な意味を持っていると判

断される。「賞」はあくまでも賞一般を表すだけであるので、主語がどのような賞を受けたのかについての情報は別の要素によって補われなければならない。したがって、「受賞」がたとえば「ノーベル賞」などの項を外部表示させることによってその情報を補うということになる。

名詞要素が総称的な意味を表していて、外部表示をするほうが自然な「受賞」以外の動名詞は、(23) に列挙したものがある。これらの動名詞は「受賞」の場合と同様の説明が可能である。

(23) 名詞要素が総称的な意味で、外部表示をするほうが自然な動名詞：
授賞、受章、授章、開会、閉会、入会、退会、増税、減税、作曲、編曲、選曲、立案、提案、入学、退学、進学、通学、在学、投稿、寄稿、脱稿、投宿、出品、返品、納品、加盟、罹患、発券、受講、投薬、出荷、発車、停車、駐車、開花、乗船、下船、造船、登校、下校、在校、入港、出港、入党、離党、……

3.2 文脈がないときに外部表示をしないほうが自然な動名詞

次に、文脈の影響を考慮しない場合に外部表示をしないほうが自然な動名詞について見ていく。たとえば「投石」は、以下のように外部表示をしないと小林（2004）では考えられている。

(24) a. 群衆が警官に投石した。
b. * 群衆が警官に<u>大きい石</u>を投石した。（小林 2004: 95）

「受賞」と同様に、先述のテストを用いて「投石」の名詞要素である「石」の意味の抽象度を測ると以下のような結果になる。

(25) ?? 太郎は次郎に$\boxed{\text{石}}$を投げたが、私は具体的に太郎が$\boxed{\text{何}}$を投げたかわからない。

「賞」のときと比較して、「石」の場合はテストの文の容認度が下がるように感じられる。このことから、「石」は個別的な意味を持っていると判断される。「投石」の「石」がすでに個別的な意味を持っているため、文の情報量としては十分である。したがって、「投石」がたとえば「大きい石」などの項を外部表示させてさらに情報を付け加えることはしない、ということになる。

名詞要素が個別的な意味を表していて、外部表示をしないほうが自然な「投石」以外の動名詞を（26）に列挙する。これらの動名詞も、「投石」と同様の説明が可能である。

(26)　名詞要素が個別的な意味で、外部表示をしないほうが自然な動名詞：
　　捺印、押印、投錨、抜錨、止血、出血、採血、着火、出火、消火、……

3.3 情報量とさまざまな文脈の関係

3.1 節と 3.2 節では、文脈を考慮しない場合の名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係について議論してきたが、3.3 節ではその関係にさまざまな文脈が関わってきたときにどうなるかということについて、文の情報量の面から考察する。

たとえば「投石」は、文脈の影響を考慮しない場合外部表示をしないほうが自然な動名詞であるが、以下のように対比の文脈を設定することによって外部表示ができるようになる。

(27)　群衆が警官に、前回のデモでは小さい石を、今回は大きい石を投石した。

3.2 節でテストを用いて確かめたように、「投石」の名詞要素である「石」は個別的な意味を表している。名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係から考えると、「投石」は、「石」が個別的な意味を表していてそれ以上情報を追加する必要がないために、外部表示をしないほうが自然だと考えられる。しかしながら、対比の文脈が関わってくると、具体的にどのような石を投げたのかという情報を補う必要性が生じ、その結果「投石」はその情報を補うために外部表示をすることになる。

「投稿」は、(28) のように外部表示をするほうが自然な動名詞であるが、(29) のように「投稿」が要求する他の項の内容によっては外部表示が随意的になる。

(28)　a.　??　太郎は毎年雑誌に投稿している。
　　b.　　太郎は毎年雑誌に論文を投稿している。

(29)　a.　　太郎は毎年学術雑誌に投稿している。
　　b.　　太郎は毎年学術雑誌に論文を投稿している。

「投稿」の名詞要素である「稿」の意味の抽象度を測ってみると以下のような結果になり、「稿」が総称的な意味を表しているということがわかる。

(30)　太郎は原稿を送ったが、私は具体的に太郎が何を送ったかわからない。

「投稿」の「稿」が総称的な意味を表しており、具体的にどのような原稿が問題となって

いるかという情報を別個に補わなければならないため、「投稿」は外部表示をするほうが自然だと考えられる。しかし、(29) のように投稿先を「学術雑誌」と指定した場合、投稿するものは論文に限定される。[6]つまり、具体的に何が投稿されるのかという情報を「学術雑誌」という項が補っていると考えられる。したがって、「投稿」が外部表示をして情報を補う必要性はなくなる、ということになる。

「作曲」は、(31) のように文脈の影響を考慮しない場合は外部表示をするほうが自然な動名詞であるが、(32) のように習慣的に作曲をしているという文脈においては、しばしば外部表示をせずとも文が成立する。

(31) a. ?? ベートーベンは 53 歳のとき作曲した。
b. ベートーベンは 53 歳のとき第九交響曲を作曲した。

(32) a. 太郎は作曲することが仕事だ。
b. 太郎は歌謡曲を作曲することが仕事だ。

「作曲」の名詞要素である「曲」の意味の抽象度を測ると以下のようになり、「曲」が総称的な意味を表していることがわかる。

(33) 太郎は曲を作ったが、私は具体的に太郎が何を作ったかわからない。

「作曲」の「曲」が総称的な意味を表しており、具体的にどのような曲が問題となっているかについての情報を補填する必要があるため、「作曲」は外部表示をするほうが自然だと考えられる。しかしながら (32) のような習慣の文脈においては、個別の曲を作るということではなく、作曲という行為を繰り返しおこなっているということに焦点が当たっているため、個別の曲についての情報は文の必須要素ではなくなっているように感じられる。したがって、「作曲」の外部表示は随意的となる。

以上 3 つの動名詞は文脈の影響を受けて外部表示の可否が変化する例であるが、外部表示の可否が文脈に影響されない動名詞も存在する。「着火」はその例の 1 つである。「着火」は (34) のように外部表示をしないほうが自然な動名詞であり、(35) のように対比の文脈を設定したとしても文の容認度は上がらない。

(34) a. 太郎はろうそくに着火した。
b. ? 太郎はろうそくに大きな火を着火した。

(35) ? 太郎はそのろうそくに小さな火を、このろうそくには大きな火を着火した。

「着火」の名詞要素である「火」の意味の抽象度を測ると以下のようになり、「火」が個別的な意味を表していることがわかる。

（36）??　　太郎はろうそくに火を着けたが、私は具体的に太郎が何を着けたかわからない。

「着火」は、「火」が個別的な意味を表していてそれ以上情報を追加する必要がないために、外部表示をしないほうが自然だと考えられる。しかも、（35）のように対比の文脈を設定したとしても、文の容認度が上がるわけではない。このことから、「着火」の外部表示の可否を決める要因としては、「火」の意味の抽象度が大きな要因となっていると考えられる。

3.4 名詞要素の意味の抽象度を測るテストの問題点

3.4 節では、先述した名詞要素の意味の抽象度を測るテストの問題点について言及する。このテストには、現時点で少なくとも 2 つの問題点があると考えている。1 つめの問題点は、名詞要素が拘束形態素である場合、そのままではテストの文の中に置けないため対応する他の語に置き換えて意味の抽象度を測らざるをえない、ということである。たとえば「受賞」「作曲」「増税」などの動名詞は、それぞれの名詞要素「賞」「曲」「税」が自由形態素であるため、そのままの形式で意味の抽象度を測ることが可能である。これに対して、「投石」「投稿」「入学」などの動名詞の場合は、それぞれの名詞要素「石（セキ）」「稿」「学」が拘束形態素であるためそのままでは意味の抽象度が測れず、対応する和語（「石（いし）」）や漢語（「原稿」「学校」）に置き換えなければならない。この置き換えの操作は、名詞要素の指し示す内容が置き換えた語のそれと一致するとは必ずしも言えないため、完全に適切なわけではない。現時点では拘束形態素である名詞要素の意味の抽象度を測れるテストを思いついていないため、今後の課題とする。

2 つめの問題点は、テストにおいてどのような動詞を用いるかということと関連している。名詞要素（とそれに準ずる名詞）はさまざまな動詞と組み合わせて用いられることから、動詞によってテストの文の容認度が変化する可能性がある。[7]確かに、「挙式」と「開式」のように共通の名詞要素を含んでいるがふるまいが異なるペアが存在する。以下のように、それぞれの動名詞を名詞要素の意味の抽象度を測るテストにかけてみると、（37）と（38）で容認度に差があると感じられる。

（37）??　　太郎は式を挙げたが、私は具体的に太郎が何を挙げたかわからない。

(38)　太郎は式を開いたが、私は具体的に太郎が何を開いたかわからない。

これに伴って、以下の例のように外部表示の可否に関しても差異がある。

(39)　a.　　太郎と花子は、丘の上の教会で挙式した。
　　b.　*　太郎と花子は、丘の上の教会で自分たちの結婚式を挙式した。
（小林 2004: 94）

(40)　a.　#　これより、開式します。
　　b.　　これより、卒業式を開式します。

この差異は、「挙式」の場合は式の種類が語彙的に決まっているが、「開式」の場合は式の種類が決まっていない、ということと関連していると考えられる。つまり、「挙式」と言ったときには挙げられる式が結婚式に限定されているのに対して、「開式」の場合はどのような式が開かれてもよい。そのため、「挙式」は外部表示が不可能であり、「開式」は開かれる式についての情報を補うために外部表示をすると言える。上記の例によって、名詞要素の意味の抽象度は名詞要素単独で決まるのではなく、動詞要素との組み合わせによってはじめて決まるということが示されている。今後は、共通の名詞要素を持っていてふるまいが異なる V-N タイプ二字漢語動名詞のペアがどのくらいあるかということをより広く検討する必要がある。

3.5 例外となる動名詞についての考察

この節では、本稿の分析の例外、つまり名詞要素の意味の抽象度に着目するだけでは外部表示の可否が説明できないような動名詞について考察する。たとえば「処刑」について、小林は以下のように外部表示が不可能だと考えている。

(41)　a.　　政治犯を処刑した。
　　b.　*　政治犯を死刑に処刑した。（小林 2004: 94, 95）

ここで、名詞要素である「刑」の意味の抽象度を測ってみると以下のような結果になる。

(42)　太郎は刑に処されたが、私は具体的に太郎が何に処されたかわからない。

上記の文が問題なく容認されることから、「刑」は総称的な意味を表していると判断され

る。したがって、名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係から、「処刑」は外部表示をするほうが自然な動名詞であると予測される。しかしながら実例を観察すると、(41b) のように外部表示が許容されない。これはすなわち、「処刑」の外部表示については別の説明が必要であることを示唆している。

可能な説明の 1 つとしては、「処刑」の「刑」がもはや刑一般を表していないということが考えられる。「処刑」という動名詞が用いられるとき、語彙的に処される刑は死刑に限られ、無期懲役や禁錮などの刑ではない。「処刑」は、名詞要素が指し示す内容が非常に限定されているという点で、語彙化（lexicalization）が起こっていると言える。名詞要素の表す内容が語彙的に決まっているために、(41b) のように外部表示が許容されないということになる。情報量の面から言えば、「処刑」は語彙項目それ自体で刑の種類に関する個別的な情報を持ち合わせているため、外部表示をすることによってさらに情報を付け加えることが不要である、ということになる。

「処刑」と比較して、「求刑」の場合は名詞要素の指し示す内容が限定されていない。つまり、「求刑」と言うとき、どのような刑が求められてもよい。この動名詞は、以下のように外部表示をするほうが自然である。

(43) a. # 検察はその被告人に求刑した。
b. 検察はその被告人に<u>死刑</u>を求刑した。

「求刑」は名詞要素「刑」が総称的な意味を表しており、外部表示をするほうが自然なため、先述した名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係と矛盾しない動名詞の例であると言える。

名詞要素の意味の抽象度に焦点を当てるだけでは外部表示の可否の説明がつかないような動名詞の他の例としては、「読書」が挙げられる。この動名詞は、以下のように外部表示ができないと小林（2004）で判断されている。

(44) a. 昨日は一日読書して過ごした。
b. * <u>シェークスピアの悲劇</u>を読書する。（小林 2004: 95）

「読書」の名詞要素である「書」の意味の抽象度を測ってみると以下のようになる。

(45) 太郎は書物を読んだが、私は具体的に太郎が何を読んだかわからない。

上記の文が問題なく容認されることから、「書」は総称的な意味を表していると判断される。したがって、名詞要素の意味の抽象度と外部表示の可否の関係から「読書」は外部

表示をするほうが自然な動名詞であると予測される。しかしながら（44b）の実例を観察すると、外部表示が許容されない。このことから、「読書」の外部表示に関しても別の説明が必要だと言える。

「読書」の外部表示は、「処刑」のときのように、語彙化が起こって名詞要素がもはや総称的な意味を表しえないという説明を適用することはできない。なぜなら、「読書」と言ったとき、読む本の種類が限定されているわけではないからである。現時点で、「読書」の外部表示について筆者は明確な説明を持ち合わせていないが、Goldberg（2001）や影山（2011）などで議論されている、習慣を表す文脈で目的語が省略されうるという事実がこのことに関連している可能性がある。Goldberg は、*read* が以下のような自動詞としての用法を確立したのは、これらの動詞が習慣を表す文脈で頻繁に使われたからであると述べている。習慣を表す文脈においては、継続的に読書をしているということに焦点が当てられ、具体的に何を読んでいるかということは問題とされないため、目的語が省略されるのである。

（46） a. Pat read in the car.
b. Pat read a book in the car. (Goldberg 2001: 518)

影山は、上記の習慣を表す文脈を日本語で表現するときに、「読書」という複合語の動詞概念が用いられると指摘している。つまり、「読書」の用法は目的語が省略される *read* の自動詞用法に対応している。このように考えると、「読書」は習慣を表す文脈で用いられ、行為そのものに重点が置かれるため、目的語を表出することがない、言い換えれば外部表示をすることがないという説明が可能だと考えられる。

4. 結論と今後の課題

本稿では、V-N タイプ二字漢語動名詞の外部表示という言語現象について、さまざまな文脈の影響を考慮すると、小林（2001, 2004）のように外部表示の可否を語彙項目ごとにはっきりと決めることは困難であるという点に着目し、先行研究の不備を指摘した。そして、そのような文脈がないときに外部表示の可否を決める要因の 1 つとして、動名詞内部の名詞要素が持つ意味の抽象度が挙げられると主張した。具体的には、ある V-N タイプ二字漢語動名詞の名詞要素が一般概念や総称的な意味を表している場合、その動名詞は外部表示をするほうが自然であり、それに対して名詞要素が個別的な意味を表している場合、その動名詞は外部表示をしないほうが自然だ、という関係になっている。

本稿は、V-N タイプ二字漢語動名詞の外部表示という言語現象に対して、外部表示の可否を決める基準を先行研究よりも明確に提示した。先行研究では、外部表示の可否に関して具体的な判断基準が設けられていなかったが、本稿では Barros（2013）のテスト

を応用して名詞要素の意味の抽象度を測るという方法を採用した。しかし 3.4 節で述べたように、名詞要素の意味の抽象度を測るテストにはいくつかの問題点が存在し、それらを解決するために、今後は V-N タイプ二字漢語動名詞全体を網羅的に扱わなければならないと考えている。

また本稿は、文が必要とする情報量の問題に関して、動名詞内部の名詞要素が持っている意味が必要な情報量を変化させる可能性を示唆した。文の適切な情報量は、どのように決まっているかが定式化しにくいものであるが、本稿は、名詞要素の意味の抽象度が適切な情報量を決める 1 つの要因となっているという可能性を示すことができた。さらに、本稿の分析は、語内部の要素である名詞要素が持っている要因を、文の情報量という語用論的な要請から求められる要因に帰着させることにより、名詞要素の意味の抽象度による影響と文脈や動名詞の他の項による影響との相互作用に対して自然な説明を与えることができた。

今後は、名詞要素の意味の抽象度以外の外部表示の可否を決める要因についても考察を進めていく。さらに、これからは V-N タイプ二字漢語動名詞だけでなく他のタイプの二字漢語動名詞や和語も考察の射程に入れようと考えている。先述のとおり、所属関係を有する項の外部表示についての考察もおこなう予定である。

謝辞

本稿は、2019 年 8 月 31 日に神戸大学で開催された Morphology & Lexicon Forum（MLF）での口頭発表とそれに対する質疑応答の内容を発展させたものである。その際に、大変貴重な意見をくださった漆原朗子氏、杉岡洋子氏に感謝の意を示す。また、草稿の段階で、大変有益なコメントやアドバイスをくださった伊藤たかね氏と本誌の匿名の査読者、要旨のネイティブチェックをしてくださった Joseph Tabolt 氏に心から感謝している。加えて、口頭発表の前後において、ゼミのメンバーとおこなった議論も非常に有益であった。なお、本稿に誤りがあれば、その誤りはすべて筆者の責任である。

註

1 “extra argument”という用語は本稿独自の用語であり、「外部表示によって表出された項」という意味を表す。

2 本稿において、外部表示された項は下線を引いて示すこととする。

3 小林はこのタイプの二字漢語動名詞を VN-N タイプ二字漢語動名詞と呼んでいるが、VN とだけ書いたときに動名詞全体を表すのか、それとも動詞要素を表すのかがわかりにくいため、本稿では一貫して V-N タイプ二字漢語動名詞と呼ぶこととする。

4 「銃殺」は、「銃で殺す」とパラフレーズされることから「〜で」で項が表出できるかどうかが

問題となるが、以下のように外部表示ができるのではないかと考えられる。N-V タイプ二字漢語動名詞は未調査であるため、今後詳細に検討する。

（例） a. 太郎は害獣を銃殺した。

b. 太郎は害獣をライフルで銃殺した。

5 （20）はあくまでもテストのテンプレートの一例であり、V と N の関係は動詞と目的語だけでなく動詞と主語などでもよい。

6 しかし実際は、「論文」にもさまざまな種類の論文があるため、「論文」も総称的ではないかという指摘をいただいた。ある概念が総称的か個別的かは、おそらくはっきりと区別することはできず、段階的な（gradable）ものだと考えられる。今後は、本稿で提示したテストを参考にしながら、名詞の意味の抽象度を細かく測る方法を探っていく。

7 これは、杉岡洋子氏による指摘である。

参考文献

Barros, Matthew (2013) Harmonic sluicing: which remnant-correlate pairs work and why. *Proceedings of SALT* 23, Todd Snider (ed.), 295-315.

Goldberg, Adele (2001) Patient arguments of causative verbs can be omitted: the role of information structure in argument distribution. *Language Sciences* 23, 503-524.

Jacobsen, Wesley (1982) *Transitivity in the Japanese verbal system*. Ph. D. dissertation, University of Chicago. Reproduced by the Indiana University Linguistics Club.

影山太郎（1980）『日英比較　語彙の構造』松柏社.

影山太郎（1999）『形態論と意味』くろしお出版.

影山太郎編（2011）『日英対照　名詞の意味と構文』大修館書店.

小林英樹（2001）「動詞的要素と名詞的要素で構成される二字漢語動名詞に関する再考」『現代日本語研究』8, 75-95.

小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房.

仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院.

野村雅昭（1999）「サ変動詞の構造」森田良行教授古稀記念論文集刊行会編『日本語研究と日本語教育』1-23. 明治書院.

島村礼子（1985）「複合語と派生語――漢語系複合動詞を中心に――」『津田塾大学紀要』17, 289-301.

張麗華（1992）「『VN』漢語動詞の統語機能」『日本学報』11, 155-170.